

「減災」のための日本語教育

—命令形指導の必要性についての一考察—

中川 歩美（大阪大学大学院生）

1. はじめに

インドネシアや日本は地震や津波の多い地域であるが、日本語教育に広く「減災」が取り入れられているとは未だ言い難い。1995年に発生した阪神・淡路大震災では、外国人住民が情報弱者になり逃げ遅れるなど、災害時における外国人住民の言語問題が顕在化した。それ以降、「やさしい日本語」や多言語での情報伝達など、外国人住民の被害を減らすための試みが行われており、なかでも日本語教育の分野が「減災」に貢献できるとされるものの一つに、災害時に使用される語彙・表現の研究がある。本研究の目的は、災害時における「話し言葉」の語彙・表現の特徴をつかみ、それらを「減災」を目指した日本語教育実施のための基礎研究とすることである。

2. 先行研究

災害時には「高台」「避難してください」など災害時特有の語彙・表現が使用されるが、これらは日本語学習者の理解が困難であるとされる(沢野：2013)。災害時の語彙について調査した研究には、阪神・淡路大震災時のNHKニュースをもとに「震災関連重要語彙リスト」70語を示した松田(1996)や、被災体験作文を分析し「災害重要語彙リスト」100語を示した佐藤(2009)、ラジオ放送用災害時音声素材を分析し「出現頻度・出現回数及び語彙理解度一覧」で98語を示した荒瀬(2015)などがあり、特に荒瀬(2015)は「やさしい日本語」のラジオ放送用音声でも半数以上の語が日本語能力検定試験2級以上の語彙であることを示し、日本語学習者に対する「減災」のための日本語教育の必要性を指摘している。本研究もこの立場に賛同し、先行研究ではまだ扱われていない、災害時の「話し言葉」を分析対象として、頻出語彙を調査した。先行研究は主に公的アナウンスあるいは書き言葉を分析対象として語彙リストを作成しているが、災害時には周囲の日本語話者が発する「逃げろ」などの言葉も命を左右する情報であると言えることから、話し言葉の調査も重要であると本研究では考える。また、これまでの語彙調査では「逃げる」などの基本形のみが示されてきたが、本研究では活用形、つまり実際に使用された語の形まで視野に入れて分析することとした。

3. 分析方法

本研究では、災害を地震・津波に限定してデータの収集と分析を実施する。分析対象とするのは東日本大震災(2011年3月11日)を題材にした映画・ドラマ5本の一部(計221分33秒)と、無料動画視聴サイト Youtube で閲覧可能な東日本大震災時の動画12本(計60分55秒)の合計約5時間の映像資料である。映画・ドラマは、ナレーションが多く含まれるドキュメンタリー作品を避け、ノンフィクション作品のうち発災シーンを含みそこから時系列にストーリーが展開されるものを選び、発災後から24時間以内のシーンを対象とした。Youtube 動画は一般人が発災時に撮影し自然会話が含まれるものを選んだ。これらを文字化した資料に対し KH Corder¹を用いて形態素解析を実施し、それによって得られる抽出語リストから災害時の話し言葉における頻出語彙リストを作成した。その後 KH Corder の KWIC コンコーダンス機能²を用いて頻出語彙がどのように使用されたか観察した。ただし本研究は話し言葉を分析対象としているため、映像に含まれるニュースなどのアナウンス、ナレーションは分析データから除外している。

4. 結果と考察

4.1 災害時の話し言葉における頻出語彙

KH Corder を用いた形態素解析の結果、総抽出語数は延べ語数 14,564 語、異なり語数 1,899 語であり、うち抽出結果として抽出語リストに表示される使用語数は、延べ語数 6,176 語、異なり語数 1,525 語であった。この抽出語リストを手作業で修正し「災害時話し言葉頻出語リスト」95 語を作成した。なお人名・地名などの固有名詞や出現回数 10 以下の語彙は分析対象から除外している。

最も出現回数が多かったのは「行く」(1位)で、それに続き「来る」(2位)、「はい」(3位)、「大丈夫」(4位)、「早い」(5位)、「津波」(6位)、「居る」(7位)、「どう」(8位)、「だめ」(9位)、「逃げる」(10位)が出現回数上位となった。上位3語の他、「分かる」(11位)、「中」(13位)など、日常会話で頻出すると考えられる語彙も多く含まれる結果となった。災害時特有の語彙としては「大丈夫」(4位)、「津波」(6位)、「逃げる」(10位)、「避難」(15位)といった語の出現回数が多い。

本研究が作成した「災害時話し言葉頻出語リスト」のうち、松田(1996)、佐藤(2009)、荒瀬(2015)の3つの先行研究でも同様に災害語彙として示されているのは「津波」(6位)、「避難」(15位)、「情報」(43位)の3語であった。また上記のうち、2つの先行研究において災害語彙として示されているのは、「無事」(20位)、「車」(38位)、「地震」(74位)の3語のみであり、1つの先行研究で災害語彙として示されているものは、「逃げる」(10位)、「家」(19位)、「危ない」(45位)、「連絡」(50位)、「怖い」(61位)、「波」(75位)、「水」(89位)、「船」(91位)の8語であった。本研究の「災害時話し言葉頻出語リスト」のうち先行研究において災害語彙として挙げられていない語は全部で80語であり、話し言葉における頻出語には、先行研究では重要語として挙げられていないもの

が多く含まれる結果となった。先行研究は公的アナウンスと作文を対象としており、さらに松田(1996)や荒瀬(2015)は災害関連語彙のみを対象にしたものであるため当然の結果と言える。ただし同時に、災害時にラジオなどから流れる情報や災害を思い起こして語る作文と、災害時にその場にいる日本語話者が使用する語彙は異なり、「大丈夫」、「逃げる」、「やばい」など、公的なアナウンスでは使用が少ないが、災害時の話し言葉において、身の安全を守るために重要と思われる語彙が存在することが示された。

4.2 災害時の話し言葉における命令形の使用

次に災害時の話し言葉における頻出語彙が、それぞれどのような文脈で使用されているのかを観察した。KH Corder の KWIC コンコーダンス機能を用いて、各語彙の出現文を抽出したところ、「来る」(2位)、「逃げる」(10位)、「上がる」(14位)の頻出回数上位の動詞について「こっち来い」「早く逃げろ」「上がれ上がれ」などの命令形が多く使用されていることがわかった。出現回数が少ない動詞についても、「(外に)出る」「気を付けろ」「(車に)乗れ」「急げ」などの命令形による表現が見られた。防災無線や緊急地震速報といった公的アナウンスではこのような表現が使用されにくいことから、命令形による注意喚起は災害時における話し言葉の特徴であると言える。

ここで、日本語教育文型の命令形にまつわる議論が思い出される。日本語の初級教材には基本的に命令形が提出されているが、日本語の日常会話で命令形を使用する機会は少ない。その結果、教材の練習問題は銀行強盗が登場する場面など非日常的にならざるを得ず、それを受けて、小林ミナ(2005)など、命令形を初級文法から削除すべきとする立場がある。しかし、それぞれの日本語教育機関では教材を元に作られた1年間のカリキュラムや、それに合わせた課題や行事が既にあり、簡単に教科書の一部を削除できないという現状があるのではないだろうか。また一方で、同様に「減災」のためのコースを新設したり、既存のカリキュラムを差し置いて授業時間を全て「減災」教育に充てるのも困難ではないかと推察する。そこで本研究では災害時における話し言葉の分析結果から、命令形指導を「減災」のための日本語教育として活用することを提案したい。命令形指導の導入や練習時に使用する場面や会話例に災害時の状況を用い、「逃げろ」や「急げ」といった表現により文型の学習をしながらも、その授業を、特に日本に住む学習者が地震や津波を考えるきっかけにする。これにより教室での非現実的な命令形練習という問題を解消し、さらに学習者に災害時特有の語彙・表現を学習する機会を提供できると考える。

日本語初級文型という観点から災害時の話し言葉を観察すると、命令形以外にも、「走って」「急いで」「逃げて」「落ち着いて」などの「て形」による指示や、「避難してください」「急いでください」「(中へ)入ってください」などの「～てください」、「避難したほうがいい」「高い所に居たほうがいい」などの「～たほうがいい」といった、日本語教育で初級文型として提出される表現が注意喚起に使用されている例が多数見られた。

以上のことから、現状の日本語教育の現場に「減災」教育を取り込むことは十分可能であり、また、災害発生時には周囲の日本語話者の発する注意喚起を理解できるかどうか命を左右することもあると考えられるため、その学習の重要性が指摘できる。

5. おわりに

以上本研究では、災害時における話し言葉の頻出語彙を示し、その活用形まで観察した。また災害時の話し言葉における、命令形などの日本語初級文型を用いた注意喚起表現に注目し、日本語教育に「減災」を取り入れる提案をした。ただし「減災」教育においては語彙・表現だけを指導していても効果は低い。これをきっかけに地震・津波に関する知識や自分の住む土地についての知識を学習者が学ぶ必要がある。「減災」のための日本語教育の具体的なシラバス作成および、授業実践とその報告が今後の課題としてあげられる。また本稿では触れなかったが、「津波おっきいぞ(津波大きいぞ)」「やべえ(やばい)」「逃げよ(逃げよう)」などの話し言葉特有の表現や、「こっちこー(こっちに来い)」「危ないから上がって来ねば(危ないから上がって来ないと)」などの方言の理解も重要であり、その学習方法についての研究も今後の課題としたい。

注：

注1：KH Corder とは立命館大学の樋口耕一氏が開発した、テキスト型データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアであり、オンライン上でダウンロードが可能である。形態素解析を行い頻出語彙リスト等が作成できる。

注2：KWIC コンコーダンスとは KH Corder に内蔵されるツールのひとつであり、抽出された語彙(例「逃げる」)の、テキスト中の元の形(例「逃げろ」)や、前後の語(例「早く逃げろって」)を同時に検索することができる。

注3：口頭発表は10日(土)に行われる。

【参考文献】

- 荒瀬雅子(2015)「災害時の「やさしい日本語」を教室教材として使用方法を探る～ラジオ放送用災害時音声素材を中心に～」『龍谷大学国際センター研究年報(2015)』第24号 p21~34
- 小林ミナ(2005)「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」『コミュニケーションのための日本語教育文法』野田尚史編 p23~41 くろしお出版
- 佐藤和之(2009)「外国人被災者のための地震基礎語彙シソーラス試案」『「やさしい日本語」の構造』p53~63 弘前大学人文学部社会言語学研究室
- 沢野美由紀(2013)「留学生を対象とした震災関連語彙の理解度調査」『東京経営短期大学紀要』第21巻 p37~43
- 松田陽子(1996)「非常時の対応のための日本語教育—阪神大震災関連調査からの考察—」『日本語教育』第92号 p13~24